

本因坊秀栄（1852～1907）

秀栄は現代の棋士に高く評価されています。理由は「明るさ」。明るさとは石の働きに関する鋭敏な感覚と、形勢判断の正確さを含めた表現です。

秀栄の父秀和を中心とした幕末の囲碁隆盛は、秀策・秀甫を経て秀栄と言う異色の天才を世に送り出しました。秀栄は十四世本因坊秀和の次子。十一歳で林家の養子となり、十六歳で十三世を継いだものの明治の政変で家禄を失い、間もなく秀和の死を迎えます。

明治六年から八年まで手合いを離れたのは、遊歴に名を借りて現実逃避をしたのかもしれない。九年春、二十五歳五段で碁界復帰、堰の切れたように碁才を発揮し始めます。十二年四月、村瀬秀甫が方円社を設立。秀栄は弟秀元、安井十世算哲とともに参加しましたが、十五世本因坊を継いでいた兄秀悦は精神衰弱のため不参加。家元連は免状問題で脱退し、秀栄はまた五年に亘り手合いを中断します。その間に秀悦死去し、十六世を継いだ秀元も伸びず、実家の不振は顕著。ついに決意した秀栄は林家を断絶とし、本因坊家に戻って十七世を継承します。再復帰した秀栄は三十三歳。最初の碁は十七年暮、秀甫でした。秀甫はすでに2級（八段）に達していましたが、秀栄は六段格の先。この頃、和解工作が後藤象二郎などの政治家によって進められ、秀甫・秀栄戦が第十局を迎えたところで、秀栄は秀甫を改めて八段に進めて本因坊の名跡を譲り、秀甫は十八世の名で秀栄を七段に進めました。この時秀栄の出した条件は、方円社の級を段に戻す、方円社免状に本因坊の奥書きを要する、秀甫の後継者には実力一等の者をあてる、でした。ただし秀元はこの和解に不満で、終世秀栄と疎遠になります。しかし秀甫は十八世を継承後二カ月余りで急逝。ふたたび起きた問題に二代目方円社社長中川亀三郎が絡みますが、秀栄の争碁申込に亀三郎は受けず、秀栄が十九世を名乗って落着きます。方円社は級位制を続け、秀甫和解の三条件は破棄されました。その後秀栄には四年の中断期間があり・・・日本から国外退去を命ぜられた朝鮮の革命家金玉均（日本名岩田周平）を訪ねた。一歳年上で、方円社にも名を連ねた金玉均とは肝胆相照らす仲だった。遠路苦難の道を訪ねてきた友人の姿をみて金玉均は感涙にむせんだという。三か月ほどの逗留の間、二人はよく歓談しときには碁を打って楽しんだ。三度目の本格的な碁界復帰は、秀栄が明治二十五年に囲碁奨励会を開始してからです。三年、十九回を数えましたが、資金不足のため中止。しかしその間、高田商会慎蔵夫人民子の知遇を得て、新たに四象会を発足させました。秀栄は四象会において第一人者の地位を確立します。明治三十七年までのほぼ十年間に102回、古参碁士のみならず参集する方円社の若手棋士をも次々と打ち下げ、定先を維持する者は田村保寿ただ一人、という傑出した力を示したのです。その四象会も民子が弟子問題に容喙したことから袂を分かちます。新しく立ち上げようとして日本囲碁会の準備中、喘息悪化のため死去、明治四十年二月、五十六歳でした。秀栄は芸術家気質の為人気はなかったがひたすら盤上の真を追い求め、そして完全に近い美を実現した名人中名人でした。

完